

正宗文庫の歴史

小川 剛生

*キーワード

正宗敦夫・井上通泰・桂園派歌人・予約出版・歌文珍書保存会

正宗敦夫という人

正宗文庫の所在地は、岡山県の東端、片上湾に面した、備前市穂浪です。歌人で国文学者であった正宗敦夫（一八八一―一九五八）が昭和十一年（一九三六）（六月財団法人認可、八月発足）に設立、コンクリ作りの堅牢な二階建ての書庫に、膨大な書物を収めています。蔵書の内容は主として古典籍で、貴重な写本が目立つ。およそ七千点二万冊、個人の蔵書としては質量ともに全国でも稀であると言えます（図版1 正宗敦夫）（図版2 文庫全景と正宗甫一）。敦夫の後は令息甫一氏、令孫千春氏によって継承され、現在まで活動を続けています。

正宗敦夫といえは、「日本古典全集」という六期二百六十六冊にも及ぶ、古典文学・歴史書・辞書の叢書を刊行したり、岡山藩の儒者であった熊



図版1

沢蕃山の全集を出したり、万葉集総索引を編纂したりと、多大な業績を挙げた学者です。残念ながら、敦夫は歴史のかなたに霞みつつあり、作家の正宗白鳥の弟、洋画家の得三郎の兄…という紹介になってしまっています。正宗白鳥さえ現在ほとんどの著作が絶版になってしまっています。正宗文庫がいかに重要である、といっても、共有の知識がないので、なかなか理解されません。

私は足掛け九年間、国文学研究資料館に勤務しております、正宗文庫の書物の整理に少しでも力をお貸ししましたので、今回、講演の役目



図版 2

をおおせつかりました。もつとふさわしい人がおられるとは思いますが、それでも、いつのまにか二十年も正宗宗と正宗文庫にお世話になっ

てまいりましたので、少しでも感謝の気持ちを表したいと思えます。

ただ、地元でも敦夫のことがあまりにも知られていないのは、時間の堆積のせいだけではないと思います。敦夫はいわゆる著作は何も残さなかった人です。いまの学者は書いたものを論文集や著書にまとめて公刊しないと、生きていけない時代です。そういう時代ではなかったせいもありませんが、それにしても敦夫自身が書き残したものとしては、短歌、エッセー、考証、とくに解題といいまして、書物の成立を簡潔に記した文章くらいしか生前には公にはしませんでした。索引や解題はいかに労作でも、話題とはなりにくい。およそ自己顕示欲のようなものが極めて乏しかった人です。

正宗敦夫先生訪問記

敦夫の学識は書かれたものからも偲ぶことができますが、ここで

最晩年のインタビュー記事を紹介したいと思えます。昭和三十一年（一九五六）、岡山朝日高校の学生が、ノートルダム清心女子大学に勤務していた敦夫を訪問した時の記録です。敦夫が生前の与謝野鉄幹・晶子夫妻と仲が良かったので、まずは、そのことを尋ねようとしたようです。高校生の眼に映った敦夫は、実にかざらない、素朴なおじいさんであったようです。正宗文庫についてのやりとりを引用してみます。

「正宗文庫にはどんな本がありますか」

「近けえ所で珍しいのは、太田せんさい（注・全齋）といふ大学者、それが親子四人で漢字しよくぜい（注・韓非子翼龜）を出した。保存目的で二十部刷つたんじゃ。今数部持つている。それは漢文大系に出とる。親子四人で涙のこぼれるほどやつた。昔の本で『金葉集』ここ（注・ノートルダム清心女子大学）で講義をしている。『伝慈鎮』、慈鎮が書いたという本があるし、為家の書いたという本もある。」

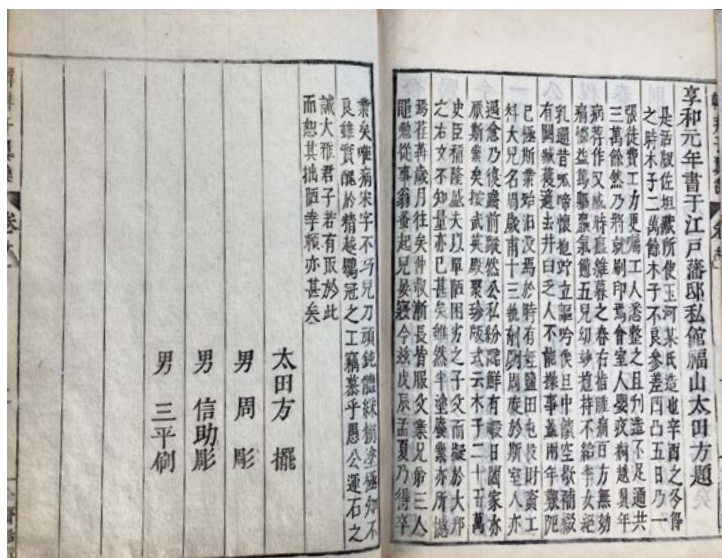
「文庫には何冊ぐらいありますか」

「えー二万冊ほどある。やくざの本はえろうねえ、今で一冊が十万円する本もある。短ざく、いわゆる筆せき類がいろいろある。」

いかがでしょう。もちろん内容の不備はありますが、たいへん貴重な記録だと思いますし、敦夫の人柄が実によく伝わるのではないのでしょうか。

少し要らぬ講釈を加えますと、金葉集は五番目の勅撰和歌集、敦夫が晩年に熱心に研究し、蒐集した貴重な古写本は、没後ノートルダム清心女子大学に譲られています。

敦夫が文庫の珍品中の珍品として紹介しているのは、福山藩儒者、太田全齋（方。一七五九〜一八二九）の韓非子翼蠹という本です。高校生たちは知らないで変なふうに表示してしまった。戦国時代の法家の書、韓非子を全齋が注釈した書です。翼蠹とは親鳥が雛を羽根で包んで育てることで、解釈の助けということです。和歌が専門なのになぜ漢籍を挙げるのかと思われるかも知れませんが、この本の出版には有名な逸話があり、敦夫もそのことを語っています。この本は木活字で刷られてい
 す（図版3 韓非子翼蠹刊跋）。江戸時代は整版本、一丁を一枚の板木で刷る技術が普通でしたが、板木は大部の本ではたいへんな重量でかさばります。制作費も高い。そうすると売れる見込みのない本はなかなか出版できません。しかも幕府に届けを出さなくてはいけない。そこで、江戸後期、少部数の印刷物では、木の活字で数丁分づつ組んで、印刷して、ばらしてつぎの丁を組んでまた印刷、という方式が行われました。韓非子翼蠹もそうでした、全齋が苦勞して作った原稿がしばしば火事で失われそうになったので、副本をいくつか作っておこうと考えたのが動機なのですが、ともかく資金も人手も無かった。そこで八年にわたって、息子たちと苦勞して活字を拾って組んだそうです。そのことが巻末の跋文に語られています。太田方「擺（ならぶ）」とあるのは、全齋が活字を組んだこと、息子三人は活字を「彫」ったり、紙に「刷」ったりしています。後世、韓非子解釈のスタンダードとなる名著がこんな苦勞をして世に出たという点、敦夫が高校生に語りたかったことでしょう。ただ二十部しか無いとは言い過ぎで、もう少し刷ったようですが、たしかに



図版 3

稀覯本です。そして、このようにして世の中に苦勞して価値のある書物を出すこと、実は敦夫の仕事ともよく重なります。

今回は、正宗文庫についてお話しする訳ですが、まず敦夫の仕事について知っていただきたい。とくに若い時の活動についてお話しします。これは岡山の文化史の一断面、明治の中頃に、地方で志ある若者がどうやって学問していたかもよく表す事例ではないか、それによって、おの

ずと文庫についての理解も深まると思います。

正宗文庫の設立趣意書

敦夫は地方で学問をすることの困難さを繰り返し語っております。研究に必要になる書物は、この時期は公共図書館が発達していないから、おのずと自分で蒐集することになります。知り合いに頼み込んで写す、本屋の目録を見て手当たり次第に注文する。まずはここに根拠があります。

やはり晩年の文章から引用します。

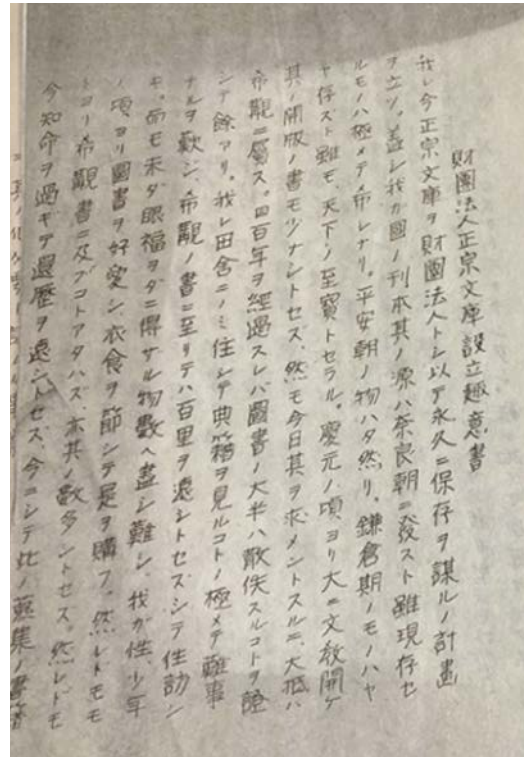
本と云ふ物は不思議な物で有る。蒐書を趣味にすると云ふと道楽者の様だが、書籍は学問だけに用ゐればよい訳で、稀な珍らしいと云つて集めるのは外道には相違ない。然し世の中のもの著作位本気で作られた物はない。尤明治からは金貫けでした本も多いらしいが先づ徳川時代とて、とにかく大方の本の出版は著者に利を付ける本はめつたに無かつたから、本気で無ければ出来ぬ仕事従つてどの書籍でも時有用が有つて見度い事が出て来る。さうなると是又中々有る物で無い。東京都なら又工夫も有らうが、田舎ではどうにも成らぬのが実情である。そこで珍書稀書蒐集もたゞ道楽であると云つて笑つてもゐられぬ。本と云ふ物は有る様で無く、無い様で有る物で、実に不思議千萬なもので有る。⁽³⁾

軽い文章のようですが、書物への強い思いを感じ取れるのではないで

しょうか。現代の出版物は洪水のようで、その価値は下落の一方ですが、昔の書物というのは人間の精神の営みの結晶であつて、生半可な覚悟で出せるものではない、と述べていて、ゆるがせにはいけないと考へていたのだと思います。

昭和十一年（一九三六）、正宗文庫を財団法人にする時に提出した趣意書があります。ガリ版刷りで、活字にはなつていませんが、たいへん立派な文章です。インタビューでは岡山弁丸出しでしたが、こちらは彼のインテリジェンスを証明する、格調高いものです（図版4 趣意書）。その一部です。

我レ田舎ニノミ住シテ典籍ヲ見ルコトノ極メテ難事ナルヲ歎ジ、希観ノ書ニ至リテハ百里ヲ遠シトセズシテ往訪シキ。而モ未ダ眼福ヲダニ得ザル物数ヘ盡シ難シ。我性、少年ノ頃ヨリ図書ヲ好愛シ、衣食ヲ節シテ是ヲ購フ。然レドモモトヨリ希観書ニ及ブコトアタハズ、亦其ノ数多シトセズ。然レドモ今知命ヲ過ギテ還歴ヲ遠シトセズ。今ニシテ此ノ蒐書ノ書籍等ノ保存ヲ講ゼズハ、其ノ散佚ハ遠キニアラザルベシ。今日ノ普通ノ書籍モ、百・二百ノ年ヲ経過スレバ珍籍ノ部ニ数ヘラル、物其ノ幾割ニ及バンコト、既往ニ徴シテ推知スルニ難カラズ。今謀ヲ立テ保存ノ方ヲ講ジ置カバ、數百年後ハ国家有用ノ資料トナランコト疑フベカラズ。殊ニ我が里ハ遠ク都会ヲ離レタレバ土地ノ変遷モ少ク、幸ニ文庫建築ノ敷地モ相応ノ處タレバ、水火ノ難モ亦殆ド無カラム。



図版 4

ここで謳われていることをまとめますと、やはり書物は世の中にありそうでないもので、失われやすく、地方にあつてはいっそう参看する便に乏しい、自分は文字通り衣食を切り詰めて蒐集に努めてきて、その数も少なくない。数百年経てばいまは普通本でも珍しい本になるだろうから、保存の手段を講じないといけない。そこで災害の少ない地方の利を生かして、保存活用のために文庫を建てた。必ず将来人々の役に立つ時が来る。蔵書は敦夫個人の蔵書、郷土の資料、師・友の著作に分けて管理する。文庫の書物は地域の子女の教育に役立てたい。また文庫があれば、全国から名士が訪れて、地域の文化的な地位向上にも貢献できる。地域の困窮世帯のための寄付など慈善事業も行う、といったことを述べ

ています。

このように、敦夫は文庫の活動のうちに非常に地域への貢献、還元と
いうことを強く考えていた人です。こういうことは綺麗事のようにも思
えますが、真情だと思えます。正宗文庫の書物というのは、素性が良くて、
全国でもここにしかない、というものも珍しくありませんし、岡山に特
化している訳では全然ないのですが、それでも「郷土文庫」として独立
させている通りで、岡山出身の学者、文人、歌人の著作を集めているこ
とは、たしかにこの文庫の特色です。

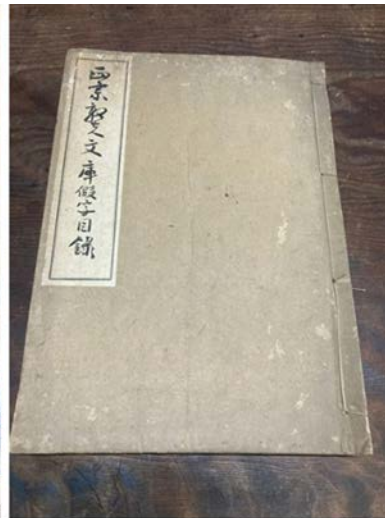
それから「師友文庫」も独立区分としました。敦夫は田舎に居たと謙
遜するわりには実際の広い人でしたから、師友の範囲も広いのですが、
眺めて見ますとやはり岡山で師事したり交際したりした歌人学者の著作
が多い。後で申しますが、敦夫はたいへん義理堅い人で、先生や友人か
ら寄贈された本は非常に大事にしたし、自分でも揃うように蒐集に努め
たらしい。そうしたものを保存して、地元で役立てて欲しいと望んでい
る訳です。蔵書家といっても、珍本・奇書を金に任せて集めるようなこ
とはせず、道楽で集めた本ではなかったということでした。

もちろん、明治・大正期の学者で、蔵書を誇った人は珍しくありません。
いまもその旧蔵書の全部・一部が伝えられている場合も多いです。「○
○文庫」と個人名を冠して、遺族の手から離れて、大学や公共図書館の
コレクションになっていることもあります。敦夫の場合も、さきほど触
れました通り、金葉集を中心とした古写本がノートルダム清心女子大学
附属図書館の所有となり、「正宗敦夫文庫」として公開されております。

たいへん立派なコレクションです。しかし、本体は依然として生地 of 文庫にございます。「一、本文庫所在地移転ハヤムナキ場合ヲ生ズルコトアルモ穂浪字難田ノ内タルベシ。」と、敦夫は正宗文庫がたとえ移転やむなきの時となつても、いつまでも穂浪の地にあることを強く望んでいるからです。このため、正宗家の方たちはすでに八十余年、文庫をこの地で守っておられますが、建物と厩大な典籍を個人の力で維持管理していくことがいかに難事業であるかは多言を要せず、たいへん尊いことだと思います。

正宗文庫という構想は非常に古くて、明治三十七年（一九〇四）二月、二十三歳で、自宅に「少年図書閲覧所」を開設しています。友人の小野節（倉敷市の玉島長尾の豪農）への書簡で、「本年より文庫をと、のへて公開閲覧をゆるす考に候、尤も子供によましむる目的に候」と述べています。ところで、正宗文庫にはその翌年の手書きの書目リストが遺されています。ところで、蔵書がアイウエ順に列挙されています（図版5 正宗敦夫文庫仮字目録）。これは自身のためというより、やはり閲覧用に見えますから、少年図書閲覧所に関するのではないのかと思います。活字本ばかりで、当時知られていた、江戸・明治の歌人の家集・歌論、和歌の本が多い。

正宗文庫の起源は、敦夫の若い頃の活動に発しています。ふつうの学者ではまだ学生の時期ですが、すでに旺盛な活動をしております。それは正宗家の家風とも関係いたします。この点を続いております。



ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	カ	キ	ク	ケ	コ	カ	キ	ク	ケ	コ
天竺	海王の樽	殿后の人録	あやせのしよ全	加茂夏蘭編	足代弘訓	小沢吉庵	田安宗武
...
...

図版 5

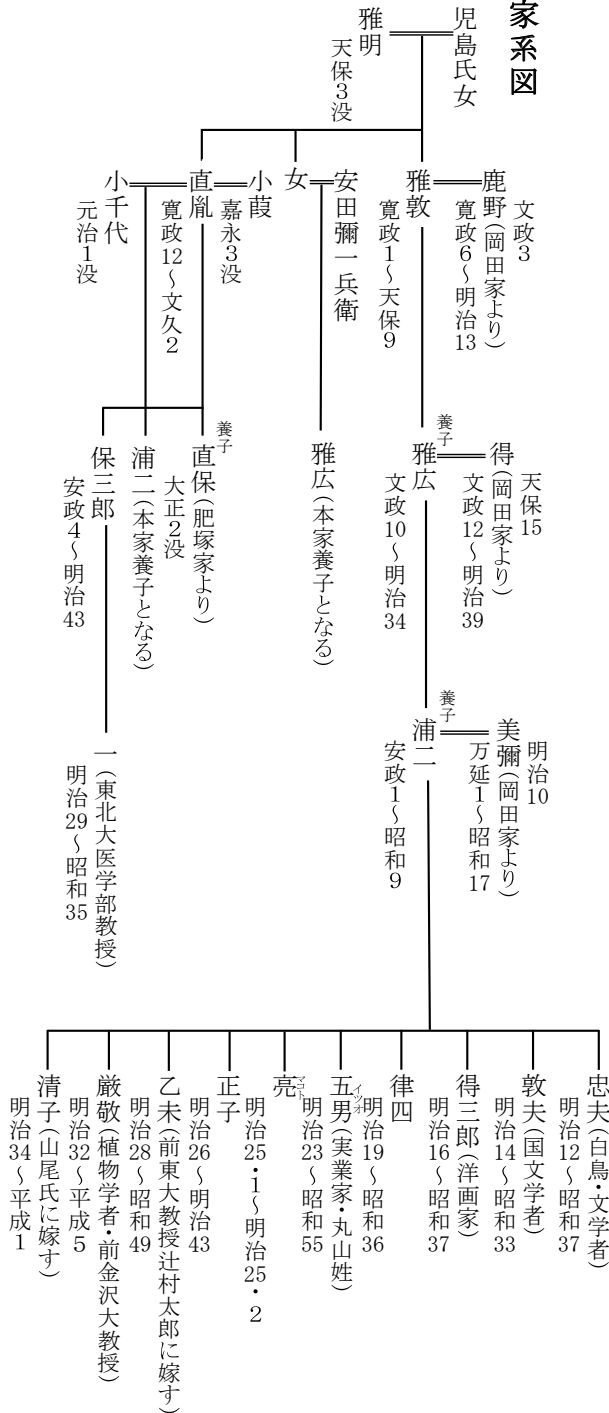
学問の始まり

正宗家は敦夫の曾祖父の代から網元や材木商として成功した旧家であり、父浦二は、地元経済界の重鎮で、その実直で謹厳な人柄は、白鳥の小説『今年の春』によく描かれています。敦夫は十人もいた兄弟姉妹の

二番目の子です。二歳上の兄が忠夫、白鳥です。兄弟からは他にも学者や芸術家が輩出したのですが、忠夫が故郷を早くに飛び出したのに対して、敦夫は父の監督下で、家業と墓を守る生涯を送りました（図版6 正宗家系図、吉崎志保子『正宗敦夫の世界』による）。西片上の高等学校を十四歳で卒業後、すぐに父の命令で、事業を始めます。岡山まで舟で通って、商品を仕入れて、穂浪で売り捌く、よろず屋のようなことをしていたようです。先祖には文学を好んだ人はいましたが、決して風流三昧の御大尽ではなく、子供たちに働かないでぶらぶらするよう

なことを許すような家ではなかったそうです。敦夫は歴史や古典文学が好きだったようで、本格的に勉強してみたいと思ったのでしょう。当時、そういうことに志すのであれば、しかるべき歌人に入門することは必須だった。いまは研究と創作とはきっちり分離していますが、当時は短歌を作らないと古典文学も分らないというのは自明だったのでしょう。そこで岡山に居住していた歌人、井上通泰（一八六七～一九四一）に入門します。それは明治三十年（一八九七）夏と考えられています。敦夫が一六歳、通泰も三〇歳です。

正宗家系図



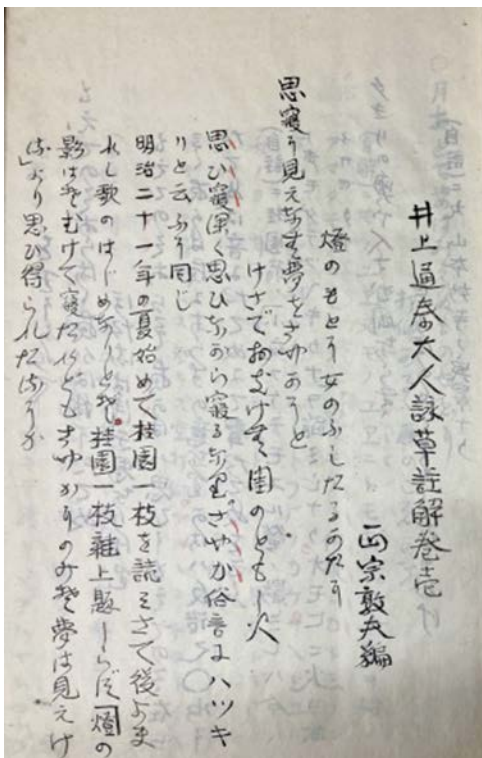
図版 6

井上通泰の本職は眼科医で、岡山医専の教授でした。姫路の儒者であった松岡操の子です。柳田国男の兄といえは分かりやすいでしょう。歌人としての通泰・敦夫は、江戸時代後期の香川景樹という歌人を祖とする、桂園派という流派に属しています。歌風はいわゆる旧派、伝統的ですが、景樹の門弟は全国に広がっていました。幕末の備前・備中にはことに門人が多くて、菅沼斐雄・木下幸文・高橋残夢・穂井田忠友といった高弟が出ています⁵⁾。敦夫は形式的には松浦辰男に入門したことになり、池袋清風にも指導を受けたようですが、実際は通泰の弟子です。

敦夫が通泰のどこに惹かれたのか―明治時代の文学史でも興味あるテーマだと思いますが―通泰は東京大学で医学を学ぶうち、ドイツより帰国直後の森鷗外を知り、落合直文・市村瓚次郎とともに新声社を結成、明治二十二年、雑誌『国民之友』の夏期附録「於母影」で、英仏独のロマン派の詩を共訳を発表、好評を博します。その稿料を元手に鷗外は文芸雑誌『しがらみ草紙』を創刊し、通泰も同人として活躍の場を得ますが、面白いことに、通泰は西洋の詩にかぶれた後、香川景樹の和歌に感動し、桂園派に傾倒しています⁶⁾。『しがらみ草紙』には作歌とともに、「桂園叢話」として、桂園派の研究成果をしばしば発表します。桂園派歌人と言いましても、古い革袋に新しい酒を盛ったようなもので、通泰は決して古めかしい人ではありません。「新桂園派」という人もいます。その宣伝努力もあり、桂園派はむしろこの時期に最後の輝きを見せるようです。敦夫もその流れのうちにあります。

井上通泰の和歌を注釈

敦夫は、『しがらみ草紙』や『めざまし草』に発表される通泰の和歌を感激しつつ書き留めており⁷⁾、実際にその聲咳に触れるようになりますと、それに注釈を付け、井上通泰大人詠草註解（図版7 井上通泰大人詠草註解）としてまとめています。明治三十二年（一八九九）のことで、まだ十八歳です。丁寧には作られ、同じ井上門下の川上清辰（飛驒の人、一八七〇～一九〇二）に校閲してもらって、その意見も書き加えるという念の入れ方です。その稿本が正宗文庫にあります。「はしがき」を掲げます。



図版 7

我師井上大人のよみいでられたまへる歌、数こそすくなけれ、いづれもいづれもうるはしき玉にたとへつべき物なり。己しがらみ草紙・めざまし草なとくさくさの雑誌に見えたるをうつしとれるを日毎にくりかへしくりかへし歌ひこゝろむるに其味いやまさりにまさり行きて大方の歌よみなとの歌とはくらふべくもあらず。人丸赤人たちの集にもをさをさおとるましようなんおほえはべる。めでたさのあまりにこれか註解をしるしこゝろみむとす。

人丸・赤人になぞらえるとはいくら何でも褒めすぎです。注釈は、語釈や現代語訳をした上で、掛詞などの修辭を指摘したり、参考となる歌を指摘する、普通の形式です。ただ、通泰に作歌事情を聴いて、それを自注として載せていて面白い。冒頭の一首を紹介します。

燈のもとに女のふしたるかたに

思寝に見えなむ夢をさやかにとけさでおきけむ闇のともし火

思ひ寝、深く思ひながら寝るなり。さやか、俗言にハツキリと云ふに同じ。

明治二十一年の夏、始めて桂園一枝を読み、さて後よまれし歌のはじめなりとぞ。桂園一枝雑上、題しらず「燈の影はそむけて寝たれどもさやかにのみぞ夢は見えける」より思ひ得られたるにか。

現実の出来事ではありませんで、「燈のもとで女が臥している」という題詠でしょう。女がどうして灯りを点けて寝ているのか、いろいろな想像が出来るわけですが、ここではあくまで、訪ねて来てくれない男を恨みつつ、一晚中、女は待ち続けるという、伝統的な題詠の約束事に則つ

ているわけです。「男のことを思いながら寝る。すると夢に思う人が現れるというから、それがはつきりと見えるようにと、消さないでおいたのか、寝室の灯りを」という意です。題詠の伝統に沿っていますが、やはり女の心情を深く思い遣るというか、たちいつて詠んでいる辺り、ただの旧派ではないという印象は受けます。

敦夫は、この歌が明治二十一年、通泰が桂園一枝を読んでから初めて詠んだ歌であるとしています。通泰自身から聞いた話柄でしょう。下宿にたまたまあつた桂園一枝をばらばらと見ているうち、「春の野のうかれ心は果もなしとまれといひし蝶はとまりぬ」の一首で開眼したと言います。⁸⁾

敦夫もまたこの注釈で、通泰を桂園派の衣鉢を継ぐ歌人として位置づけようとしていると言えます。香川景樹の家集、桂園一枝の和歌を踏まえた指摘したのはそのためでしょう。ただ景樹の和歌を桂園一枝に就いて見ますと、老後の寢覚めを歎いた歌らしいですので、表現を借用したということになります。

それにしても、いったいどうしてこんな注釈を作ったのか、という疑問が生ずると思います。注釈とは原典が難解だから作られる、と考えがちですが、しかし、通泰の和歌、表現の上では必ずしもそんなに難しいものではありません。

敦夫は、通泰の和歌はまだ世の中には十分に理解されていない、もっと深く理解されるべきだ、と考えたのでしょう。地方にあった若者ならではです。「注釈」というのは、たとえば南宋の朱熹のそれや本居宣長

の古事記伝でもそうでしょうが、「古典」の作者の言いたいことは本当はこういうものだ、と語るものです。たとえメジャーなもので、新しいものでも、その真価が理解されていないと思ったからこそ、筆を執ったのだと思います。それは一人よがりであったのかも知れませんが、しかし、自分の価値の認めたものを、世間にもっと知ってもらいたい、という熱意、信念は、これから先も大して変わっていない気がいたします。それが出版という形で現れます。

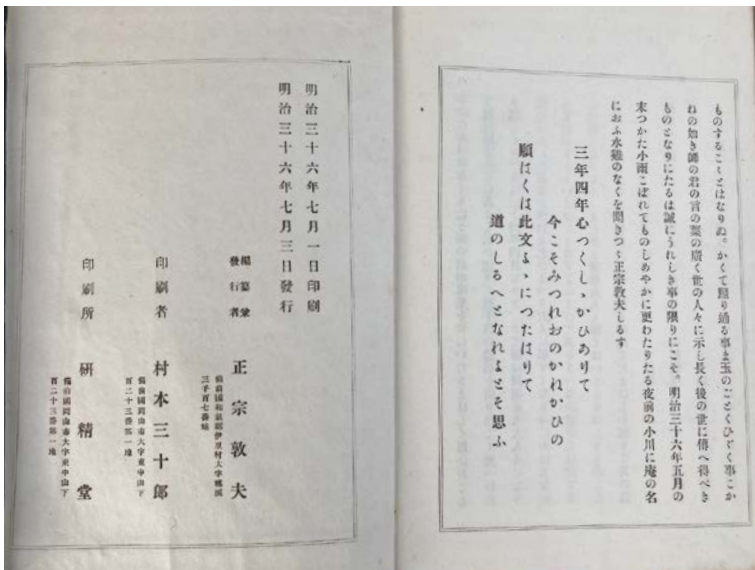
桂園派・備前歌人の歌集の編纂・刊行

敦夫は通泰の奨めもあり、桂園派歌人の詠草、業績を世の中に出すことに心を砕いています。それも歌壇で一派を立てた人ではなくて、埋没してしまつたような人に目を向けています。

まず、池袋清風（一八四七〜一九〇〇）の詠草を編みます。清風は日向都城の人、現在ではやや忘れられていますが、同志社で英学を修め、キリスト教に皈依して、典雅ながら新しい歌風を打ち出した、桂園派でも異色の歌人です。敦夫は通信教育で清風の指導を受けた。ただ、その期間は数年に足らず、直接会つたこともないそうです。ところが、その特異な歌風が世に埋もれるのを惜しんで、また門下が積極的に動かないために、敦夫は未亡人に頼んで数千首の詠草を送つて貰い、桂園派重鎮の鎌田正夫と、井上通泰に選抜を依頼しています。そして清風の伝記を附して、一冊にまとめて、三八九首の『か、しのや集』として出版。明

治三十六年（一九〇三）七月のことです（図版8 刊記）。「か、しのや」は清風の号です。

通泰のような有名人を表に立てながらとはいえ、敦夫の編集作業は、苦勞の連続であつたようです。最大の難事は資金不足で、内情を親友の小野節宛の書簡で赤裸々に語っています。



図版 8

かねても申候通、池袋清風大人の家集、此程編輯相すみいよく出版と申す段に相成候処、彼の門下に好相談あひてを得ず、もとく出版は湯浅君がなすハズ、小生は編輯のみの考えなりしに、同君は洋行致され其出版の方法は示されず、多少腹た、しく候ものから、いかにともなしがたく、此ま、打すて、出版は知らぬとは池袋夫人并に御親父に申されず、兎も角も出版を引受候、扱て出版となると編輯とはかはりて、金が先に立ではいかにともなしがたく、小生も御存の如く部屋住の身、道楽に多くの金を出す事はもとより出がたく、書籍だにともすれば心にまかせぬ事有るに、まして師の為とは言へ数十金を歌道楽につかではかなはぬ會計、さりとて今さら池袋門下たれかれをたづねて依頼せんも面白からぬ上に、其功あるかいとうたがはしく、今まで既に数氏に相談せしも手紙位ではとてもだめに候、

ここに出て来る湯浅吉郎(半月、一八五八―一九四三)は清風の門弟で、敦夫もあてにしていたのですが、いざとなると何も指示せずにアメリカ留学してしまった。他にも門下はいたのに皆非協力的だった。敦夫が何もかも引き受けることになった。同情を禁じ得ません。「池袋氏を気のどくに思ひて手をつけ候が小生のあやまりとは云へ、池袋門下の数氏(名は云はねど)もあまりに候、之れにてこり候」と苦々しく述べています。さらに鎌田正夫が序の体裁を立てて、原稿を取り下げると言つて来て、平身低頭して詫びて機嫌を直してもらうなど、別のトラブルにも見舞われています。

しかし、「こり候」といいながら、敦夫はつきつきに歌集の出版を手がけます。同三十六年十月には、謄写版Ⅱガリ版で、『清園後草』を出しています。やはり桂園派歌人の高橋正澄(残夢、一七七五―一八五二)の家集です。備中笠岡の人で、景樹門下の四天王に数えられています。家集はなかったようです。

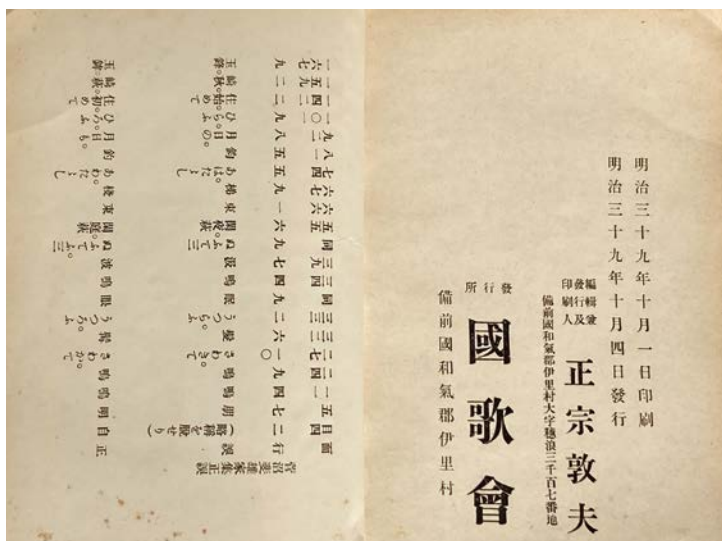
三十九年には『菅沼斐雄家集』を刊行します。斐雄も笠岡市吉浜の出身の桂園派歌人です。江戸に出て活躍したのですが、早世したせいか、まとまった歌集は存在しませんでした。岡山でこの歌人を知り関心を持った井上通泰の奨めによつて、敦夫は早く三十二年八月末、さまざまな文献から斐雄の歌を集める作業に着手しています。苦勞の甲斐あり、通泰はもちろん、森鷗外も感心して自ら正誤表を送ってくれたり、桂園派好みであった明治天皇の乙夜の覧に入れたと敦夫は語っています。さらに同時並行で、通泰の講義録である桂花余香評釈をまとめ(三十七年六月)、万葉調歌人としてこの頃にわかに脚光を浴びた平賀元義の歌集を編纂する(三十九年一二月)と、実に精力的です。平賀元義歌集は友人有元稔との共編ですが、有元が印刷屋とトラブルになって入金流れとなり、百部印刷のうち数部しか手許には届かなかった、と言います。¹¹⁾

予約出版の企画

敦夫はこうした苦い経験を積んだ後で、あらかじめ読者を募り、その予約金を集めて、出版費用に宛てる方式を採ります。自分で印刷すれば

経費は抑えられます。このために國歌会という組織を作ります。

経費面でも謄写版よりも活字出版に利があることに気づき、岡山で中古の印刷機を購入しています。まず香川景樹の日記を出したかったようですが、すぐには無理なので、明治三十九年（一九〇六）九月、月刊の和歌雑誌『國歌』を創刊。同年十月に出版した菅沼斐雄の歌集の奥付は、発行所、國歌会とあります（図版9 菅沼斐雄家集刊記）。住所は敦夫



図版9

の自宅です。

國歌会は三年後に発展的解散を遂げ、歌文珍書保存会となり、和歌を中心に、価値はあるが知られざる書物を複製・公刊することを目的に、いよいよ本格的な出版活動を展開します（図版10 『國歌』三四号）。『國歌』三四号（明治四十二年五月）に「会告」が出ています。志は高く意（氣軒昂です。

本会に於て写本版本の有益なる珍籍刊行頒布の計画有之候間、御賛成給はり度候、出版書は

家集、歌集、歌合、歌論、語格書、歌文注釈書、文集、記行、日記、隨筆

等に候、写本の如きは国々にて面白き物有之候事と存候に付、御蔵有の諸君は御貸与の程願上候、詳細なる会則は次号に広告致すべく候へども、用紙は改良美濃上等を用ゐ万代に珍籍を保存致し得る様に致す考に候、

國歌会主幹 正宗敦夫

第一回の配本はこの年十月、本居門下の国学者八木立礼（一八〇九～五七）の著、『詞瓊緋縁接』です。和歌や物語に使われる語彙を挙げて、用例からその働きを分析した語格（文法）書ですが、語格書の学習は、通泰が門弟に強く奨めていたところでした。

編集校訂に井上門下の大島仲太郎・宮内猪之熊が名を連ね、助力したようですが、版下などすべて敦夫が作り、活字を貞夫人と拾って、表紙も庭の柿で渋を取って、と文字通りの家内工業です。数百部の予約出版

歌文珍書保存會趣意書

方今文運の隆興印刷術の進歩に伴ひ古今の名著大作陸續刊行せらるるに、僕へ共少數篤志者の從事する専門特科に渉るものに至りては需用者極めて鮮くして收支相償はざるを以て公刊の便を缺き未刊のものは申す迄も無之既刊のものも年所を經るに從ひ漸次散逸して消滅に歸せんとする有様に有之遺缺少からず候に付分般同人等相圖り々々木信綱先生をはじめ其他諸先輩の贊助を得て歌文珍書保存會を組織し國歌國文に關する有益なる著作にして世間流布の途なきものを選択して之を印刷し買費を以て會員に頒布せんことを計畫し左記要項に依り實行に著手致すべく候も亦先賢の遺作は皆其心血を傾注したるものにあらざるなく而して學術の眞理は在り世人の注意せざる此等書籍の中に發見せらるる事あれば吾人が斯の舉も或は先人々爾先を願し學界に貢することあらむと存候同好の諸賢幸に御賛同御入會せられんことを希望の至りに庶へす候

明治四十二年六月 歌文珍書保存會主任 正宗敦夫 敬白

図版 10

着手しない、利益を上げつつ事業継続していくという現実的な見通し、企画力も注目してよいと思います。

書物を集めることも、こうした仕事と連動します。歌人の作品はさまざまな文献に散在して収められているわけですから、まずはそうしたものを、自分の足で集め、写し取らなくてはならない。資料、ソースが複数あれば、比較して信頼できる出典により、それでテキストを定めなくてはならない。そして和歌はできるだけ沢山載せたい。

そんな理由で、文庫の資料はどんどん拡大していったのだと思います。出版も公共の利益のため、そして忘れられた歌人の価値を世に知らせるためです。書物を公開する、少年図書館所としたのが明治三十七年ですが、正宗文庫もその発展した形であったのです。

おわりに

昭和三十三年（一九五八）の敦夫没後、文庫は雑然としてしまつて立ち入りも難しくなり、一九九〇年代に入って現当主千春氏、そして深井紀夫氏の御尽力によつてようやく書物の出納が可能となったこと、これを受けて、二〇〇二年から国文学研究資料館が調査と撮影を開始しています。それから長い間、岡山および近県の研究者に調査員として協力していただきました。

調査が全貌を明らかにするのはまだ先のことと思いますが、いくつかある敦夫の書目手控えを、活字化し、再編ないし分類した蔵書目録¹³の刊

だったと言いますが、十五年間に十九冊と比較的長く続きます。別冊として、通泰の『万葉集新考』を刊行しています。ご家族の話ですと、行商のほか、パナマ帽の製作とかいろいろと事業に手を染めて、損ばかりしていたようですが、出版だけは割合うまくいって、こうした陽の当たらない作品の紹介を続けることが出来たようです¹²。

敦夫が掘り起こし、世に出してくれた桂園派歌人、備中の歌人の作品については、その後も研究はいくらも進展していません。こうした歌人の研究は、作品がどのくらい残っているかを知るのが最初ですが、敦夫の手がけた資料が唯一となつている場合がほとんどです。敦夫の先見の明というか、誰もしなかつたことをしてくれて偉大さにもっと気づくべきだと思えます。そこには商才というか、ふつうの歌人・文学者ならば

行、資料館でのマイクロフィルムおよびデジタル画像の公開などで、少しづつですが、活用できる目処が付いて来たとは思われます。新美哲彦氏の御尽力で、正宗文庫・ノートルダム清心女子大学所蔵の、敦夫の蒐集した古典籍の影印本である「正宗敦夫収集善本叢書」第1期が開始されたことも特筆すべきです。

しかし、正宗文庫所蔵の眼目は、こうしたいわゆる古写本・古刊本ばかりではありません。これまでほとんど手が付けられていない活字本や雑誌、多くは敦夫の手がけたものですが、正直、これらはさほど注目にされることはありませんでした。しかし、今となってはむしろ珍奇であり、たとえば雑誌『国歌』^[4]のバックナンバーはもはや全国でもここにかかないと思われまます。こうしたものの調査と撮影が必要です。敦夫がどうしても世に出したくて出した本ですから、どうやって入手して、何を使って活字にしたのか、という経緯も知る必要があります。

敦夫には、桂園派歌人の一連の著作のほか、郷土文学の資料叢書の刊行、たとえば「吉備群書類伝」や「吉備和歌集」といった構想があったようです。何度か引用した、「ふぐらにこもりて」など晩年の随筆は、そうした貴重な資料の解題、また歌人の伝記考証や資料批判を記しており、これらは限られた字数ながら、基礎的研究としていまなお有益です。かつ書物にまつわる考証随筆として読んでも十分に滋味深い内容です。

敦夫の著作集は一度ならず計画されており、立派な書誌も完成されていますが、採算が理由で頓挫してしまっています。しかし、敦夫自身、手がけた出版物は売れないものであり、普通の本屋は出してくれないも

のである、ということも百も承知でした。それを万難を排して刊行してくれたおかげで、これらは辛うじて埋没しないで済んでいます。恩返しではありませんが、まずは晩年の書物に関わる考証を一書にまとめて、世に出しても良いのではないかと思います。

入口で終わってしまいました。正宗敦夫と正宗文庫について、少しでも関心を持っていただければ幸いです。

〔注〕

(1) 渡辺京治・有松茂樹・福明成子・蜂谷富貴子「正宗敦夫先生訪問記」〔『朝日文学』一〇号、一九五七年一月〕。

(2) 同書最新の研究成果として、木島史雄「簡齋文庫本『韓非子翼龜』と太田方一書誌学的分析から、近世における書籍製作の特性に及ぶ」〔『文學論叢』一五八号、二〇二二年三月〕がある。

(3) 「ふぐらにこもりて」(6)本といふもの 胡沙ふく千両〔『土』四二号、一九五六年三月〕。

(4) 小野節宛の敦夫書簡五十四通は、「くいなのおとずれ」と題して節の手で軸装され、小野家に伝えられた。吉崎志保子『正宗敦夫の世界 階上階下すべて書にして』(私家版、一九八九年)第三章で紹介される。引用も同書による。

(5) 兼清正徳「桂園派歌人群の研究」(史書刊行会、一九七二年)、『桂園派歌壇の結成』(桜楓社、一九八五年)。

(6) 『近代文学研究叢書』47(昭和女子大学近代文学研究室、一九七八年)

「井上通泰」濱崎美景『森鷗外周辺』（私家版、一九七六年）など参照。

- (7) なお、明治三十三年（一九〇〇）三月、『井上通泰詠草第一集』が岡山で刊行されている（非売品）。発行者は松田金十郎。印刷所は岡山孤児院活版部。八頁、五三首を収める、小さな歌集である。

- (8) 『井上通泰集後記』。注6前掲濱崎著参照。

- (9) 『近代文学研究叢書』4（昭和女子大学近代文学研究室、一九五六年）「池袋清風」。谷正俊「和歌改良運動と桂園派―池袋清風を中心に」（『国語と国文学』九一卷七号、二〇一四年七月）。

- (10) 「菅沼斐雄歌集に就て」（『土』二六号、一九五三年二月）。

- (11) 小泉菱三『明治大正歌書綜覧』（立命館出版部、一九四一年）。二年後の一九〇八年、有元稔は森田義郎とともに東京の彩雲閣より改めて『平賀元義集』としてから五〇〇部を発行するが、ここには敦夫の名は記されなかった。後に、尾山篤二郎が『評註平賀元義歌集』（春陽堂、一九二三年）を刊行した時、敦夫は長い解説を寄せて、最初の出版の経緯を記している。以下に一部を引用する。

さて此元義の歌は岡直廬などが蒐集に就ては随分骨を折られたが一冊の書物と成つたのは有元稔君の功で有る。僕なども手傳つた。さて之を出版する事に就て種々僕と有元君と相談したもので同君が毛筆の謄寫版と云ふものがある。其で刷つてはどんな物だらう博覽會で右謄寫版刷の見本を手にしたが其位ならば我慢が出来るやうだとの事であつた。然し予が實際して見本を作つて見ると其頃の謄寫版はどうも面白く刷り

上らず先づ之れではダメだと云ふ譯で到頭活版に附する事に成つた。其處で原本二部を造り、一部を予が藏し一本を有元君が持つて居て其の活版屋へ廻す事にした。活版屋の方では兎も角も百部を刷り上げたので有るが有元君と何か纏れを生じたので入金流れの形に成つて有元君の手には右刷上げた本は數部來たのみであつた。右印刷は明治三十九年十二月廿六日發行は同二十八日と成つて居る。半紙本で本文廿九枚四號組で有る。

- (12) 小田光雄「正宗敦夫の出版事業」『古本屋散策』論創社、二〇一九年。

- (13) 深井紀夫編『正宗文庫所藏典籍分類目録 郷土資料編』（私家版一九九五年）。正宗文庫調査班編「正宗文庫目録（五十音順、典籍編）」（国文学研究資料館『調査研究報告』二九号、二〇〇九年三月）。

- (14) 川野良「正宗敦夫編集発行『国歌』執筆者索引」（『清心語文』七、二〇〇五年八月）がある。

〔付記〕

本稿は正宗文庫セミナーにおける基調講演の内容に基づき、注を加えたものである。写真・図版の掲載を御許可いただいた正宗文庫に厚く御礼申し上げます。

